



な感覚がうかがえる事例を考察し、移動の問題とグローバルな感覚が絡み合う中で、外側の世界に対する憧れと不安が同時に駆り立てられていくプロセスを析出する。

第 3 章では、当時の「海外旅行」の概念が持つ多層性に焦点を当て、この概念の意味が幅広い範囲の海外移動から国際観光など計測や分析を要する具体的な旅行行為へ変化していくプロセスを考察する。これを通じ、海外旅行の概念が移動とレジャーの自由に対する社会的想像力の言表として持つ歴史性を解明する。次に、国際化と開放化の名の下で実施されたモビリティの制度化と管理政策の形成過程を検討する。モビリティの制度化を通じ、海外への移動は「送出」ではなく「進出」を意味するようになり、その主体は政府から国民個人へ転換した。「国民」はグローバル化の新しい主体として召喚され、積極的に国際化を成し遂げる自己のプロトタイプ（「世界の中の韓国人」）が構築された。このプロセスに対し、権威主義国民国家体制は積極的に介入した。ここで「国際化」とは、国民国家主義が再構築されるプロセスであった。こうして国家主義的コスモポリタニズムの主体性は韓国のグローバルモビリティの起源となった。そこには権威主義国家によるグローバルな想像力が投影されていた。

第 4 章では、海外旅行者のための教育プログラムを分析する。海外旅行の自由化が進んでいく中でも続いていた「素養教育」と「保安教育」は、国際化のプロセスに混入していた他者化の企画であった。国境を超える旅行者を管理・統制する方法であるモビリティの安全保障化（以下、安保化）と世界・他者想像の安保化が進むことで、危険な他者像が生み出される一方、国家の監視と新しい形態のモバイル主体に対する規律が正当化された。このような他者性の特徴であるイデオロギー想像地理には地政学的変化や、韓国の国内政治、長期の反共主義的文化政治などの歴史的・社会的文脈が反映されている。このようなモビリティ管理のプロセスから、モビリティの自由化に対応しそのあり方を模索する国家と個人の間主観的なグローバル化の力学や個別的特殊性がうかがえる。

第 5 章では、旧社会主義国や脱冷戦下の中国との国交樹立にともない、韓国の政府や大学が実施した「大学生東欧圏研修」を分析する。脱イデオロギー化の中で大学生の意識改革を図るポスト社会主義社会へのツアーは、海外旅行が難しかった当時の大学生にとって異文化接触と越境の機会となった。本研究ではその経験からうかがえるグローバル想像の再編について、(1) 社会主義の変遷、(2) 社会主義社会の多様性の発見、(3) 同胞愛の再発見と国家民族主義の進化、(4) 脱冷戦共同体としての世界認識に焦点を当てて論じる。

終章では本研究の結果を、(1) グローバルモビリティの制度化と国際化する主体性、(2) グローバル想像の安保化と他者性、(3) 移動の自由をめぐるせめぎ合い、(4) 境界作りとしてのグローバル化という論点を中心に整理する。第 1 に、国民の海外進出政策という総合的な「国際化」の企画を通じ、「国民」は国際化の主要な主体でありつつも、国家により保護、管理される脆弱な存在として再発明された。その過程で「海外旅行者」は安全保障の新たな対象として浮上した。第 2 に、モビリティ管理プロセスにおける移動の規制と想像力の制御が結びついた結果、外部、外国、外国での出会いと、目に見えない移動そのものを脅威としてとらえるグローバル想像の安保化が進行した。このプロセスは、政策や言説を主導した国家権力と、その根底に働いていた反共主義的統治性の相互作用の産物であり、グローバルモビリティの安保化と世界・他者の安保化という 2 つの次元で構成されていた。グローバルモビリティの安保化により移動は不安定で不穏なことで想像され、世界と他者の安保化により外側の世界や他者は未知で危険なものとして想定された。イデオロギー的に政治化された冷戦地理学は、脱冷戦化する国際情勢からの偶発的影響と冷戦後のコンタクト・ゾーン(contact zone)の経験により、世界の脱イデオロギー化と北朝鮮の再安保化をもたらした。第 3 に、本研究はある国家、社会、個人が国内外の政治情勢の変化の中で移動の自由という新しい課題にどのように取り組んでいたかを明らかにした。1980 年代とい

う局面は、それ以前は国境の内側にとじ込まれ外側に対し防御的な姿勢を堅持していたある国家社会が直面する閾値(liminality)として解釈できる。グローバルな想像力は、一方で移動と旅行の権利という新たな考えに対応する権力/政府の企画を軸と、他方で移動する権利や自由に関する当時の人々の願望を軸から構成され、両軸がせめぎ合う場であった。このような移動性、世界性、他者性が交渉する中で生じる移動の文化政治は、地位と資格（移動や旅行する自由）の問題だけでなく、想像（思考と想像する自由）の問題をはらんでいた。こうした自由の管理は、個人の権利を拡大することだけでなく、ポスト植民地分断体制の下で反共主義と自由民主主義を掲げていた国民国家が他者の包摂と排除の正当化を通して社会的想像力を維持することに密接に結びついていた。最後に、本研究により、グローバル化には国家の内側と外側の関係を想像しその境界を構築しようとする内発的プロセスが内包されており、このような内部の力学によりグローバル想像が新たな社会的想像力として再編されることが明らかになった。